

## 昆虫食

昆虫食とは「ハチの幼虫、イナゴなど、昆虫を食べることである」（出典：Wikipedia）。三橋 淳東京農業大学名誉教授の「昆虫食文化事典」や「昆虫食古今東西」に詳細がまとめられており、多種多様な昆虫が長く世界中で食文化として存在していたことが分かる。

2013年に、国際連合食糧農業機関（FAO）が「食用昆虫：食品と飼料の安全性の将来の見通し」において昆虫食が従来の家畜や飼料の代替となり地球環境と健康と生活に有益であると発表し、再注目されている。また世界的に市場拡大が期待されているフードテック・アグリテックの重要キーワードの一つである代替タンパク質としても期待されている。理由として、タンパク質の需要と供給バランスが崩れるプロテインクライシスの解決候補になる、フードロスなどを活用でき循環型農業生産が可能である、従来の畜産と比較して温室効果ガスを抑制できるなどが挙げられる。人工環境下での昆虫の大量生産に関する研究開発は近年始まったばかりで、現在主に対象となっている昆虫にコオロギ、ミールワーム、ミズアブなどが挙げられるが、国内外も含めて生産技術の高度化は今後の課題といえる。

2023年初頭に日本で SNS を中心とする昆虫食に関する陰謀論や炎上事件が起こったが、この原因として、1.ファクトチェックされていない事実と異なる情報が流布された。2.昆虫そのものに嫌悪感がある人たちが一定数存在する。3. Food neophobia（フードネオフォビア、未知の食品に対する恐怖）がある（日本でも昆虫食文化はあったが現在では地域が限定されているため、現在多くの日本人が食べる機会が無かったため）。4. 野外で採取されたものではなく人工環境下及び設計された飼料を与える畜産として昆虫生産を行っていることが知られていないなどが挙げられる。これらの議論の一つに「昆虫食に関する安全と安心」が存在し、食文化の歴史から昆虫食はアレルギー以外適切な生産や加工処理を行う前提であれば安全であると言える。根拠の一つに EFSA (EUROPEAN FOOD SAFETY AUTHORITY) で 2015 年より科学的な検討も行いながらその安全性が保障され、「新規食品」として現在 EU では 4 種類の昆虫が正式に認められている。同様にアジアでも、食用コオロギ生産で GAP (Good Agricultural Practices) に該当するルールを定めているタイを始め、韓国やシンガポールでも畜産化や昆虫食の解禁などがなされている。この昆虫食品の安全性の担保のみではなく、EU の新しい食品産業政策「Farm To Fork 戦略」で昆虫生産を挙げていることが大きく、日本の場合「みどりの食料システム戦略」（農林水産省）で「新たなタンパク資源（昆虫等）の利活用拡大」と位置付けられている（出典：佐々木「食用コオロギの飼料設計とスマート生産技術開発」、アグリバイオ 2024 年 3 月号 未来食としての昆虫食）。

特に日本における安全性に関しては、2023 年から始まった農林水産省 RS 事業「持続可能な農林水産業推進とフードテック等の振興に対応した未来の食品安全プロジェクトのうち、食用昆虫中の有害物質のデータベース化、管理手法の確立」で検討が始まった。日本における昆虫生産が畜産として認められるかは、この RS 事業の結果と、産業としての発展にかかっていると考える。

(佐々木 豊)